



# みち 古道が紡ぐ物語



## 北・山の辺の道（田園に埋もれた古代史ミステリー）

「山の辺の道」は石上神宮（天理市）を境にして北の道と南の道に分かれます。桜井市に至る南の道がハイキングでにぎわうのに比して、北の道は住宅開発などが進んだこともあり、その道筋をたどることは難しくなっていますが、奈良市東部の三笠山、春日山、高円山と、一方の大和盆地を望みながら歩く高台のルートは、「記・紀」「万葉集」にも度々登場し根強い人気があります。この辺りは、古代王権が形作られる時期の豪族和邇氏とその同族である春日氏の本拠地で、初期の天皇に幾人もの妃を輩出した有力氏族です。その拠点地域にある東大寺山古墳では中国の「中平」（西暦 184～189 年）の年号が入った金象嵌の鉄刀が出土しました。これは、年号の入った出土物としては日本最古ですが、古事記・日本書紀は多くを語らず、謎が秘められた氏族といえます。

### 「ささやきの小径」を通り新薬師寺から南へ

山の辺の道は、古く「日本書紀」にも見られる古道で、天理市の石上神宮を中間に、南の道は桜井へ、北の道は奈良へと至る。この道を奈良の春日大社から南へたどることとする。

境内の原生林の中の「ささやきの小径」を抜け、「志賀直哉旧居」のある高畑町の閑静な住宅街を行くと、小ぢんまりとした「新薬師寺」に至る。

天平 19（747）年、聖武天皇の病氣平癒を願った光明皇后の創建で、堂塔伽藍が並ぶ大寺であったが、幾度もの火災、戦乱に遭っている。現本堂は、火災を唯一免れた建物を本堂としたものだが、奈良時代の建立で国宝である。中には、本尊薬師如来坐像と塑造十二神将立像が安置され、これらも国宝に指定されている（宮毘羅大将像を除く）。

もう一つ、白鳳彫刻の代表作である銅造薬師如来立像、通称「香薬師」も所蔵していたが、昭和 18 年に盗難に遭い、未だ発見されていない。

ここから南へたどると、「白毫寺」に至る坂道と交わる。天智天皇の第 7 皇子である志貴皇子の山荘跡とも伝えられ、椿や萩の咲く花の寺としても有名で、高円山山腹に位置するため奈良盆地を一望する眺めも素晴らしい。

### 高台の田園地帯から奈良盆地を一望

住宅街を抜けると、高円山の麓に広がる高台の田園地帯に行く。奈良盆地を一望しながらしぼら



新薬師寺本堂と白毫寺に至る道標



山の辺の道から高円山など奈良東部の山々を望む

くして西へ下ると、崇道天皇を祀る島田神社と、それに続き同天皇陵がある。

崇道天皇は、非業の死を遂げた桓武天皇の同母弟である早良親王に追贈された称号で、現実には天皇位に就いたことはなかった。平城京の遷都先として長岡京が定められ、その造営責任者である藤原種継暗殺事件に連座して流罪に問われたが、無実を訴えて絶食し、淡路国に配流される途中で非業の死を遂げたのである。

その後、平城京では貴人の病死、疫病の流行、洪水などが相次ぎ、早良親王の祟りであるとして恐れられ、延暦 19（800）年、崇道天皇号が追贈されこの地に陵墓が築かれた。

ここから、しばらく南下すると、門跡寺院（皇族・貴族が住職を務めた寺院）「円照寺」に至る。

斑鳩の中宮寺、奈良の法華寺とともに大和三門跡と称され、華道「山村御流」の家元である。江戸時代の創建ながら、代々皇室との縁も深く格式の高い寺で、一般の立ち入りは制限されている。

また、ここは、三島由紀夫の「豊饒の海」四部作に再三登場する月修寺のモデルでもある。

### 山に向かい2つの古刹を訪ねる

「円照寺」を越え、山の麓をたどると「弘仁寺」である。弘仁5年（814年）、嵯峨天皇の勅願により、空海が創建したと伝えられる古刹で、本尊の虚空蔵菩薩像は、空海作と伝えられている。

虚空蔵菩薩は智恵や知識などにご利益があるとして信仰され、その影響からか、数学の問題や解法を記した江戸時代の算額が2つ奉納されており、奈良市指定有形民俗文化財に指定されている。

また、山の辺の道をやや逸れ、谷間に入っていくと「錦の里」と呼ばれ、紅葉の名所として知られる「正暦寺」がある。正暦3（992）年の創建で、往時には86坊の堂塔伽藍を持つ大寺院であったが、戦乱などにより多くは焼失した。

室町期に、日本で初めて清酒が醸造されたのがここ「正暦寺」であると言われ、寺域には「日本清酒発祥之地」の碑が建つ。

### 和邇氏・春日氏の歴史を探る

「弘仁寺」を過ぎると、山の辺の道は、白川ダムの畔に出るが、少し西に逸れた場所に、この地域の歴史を語る「東大寺山古墳」がある。

北の山の辺の道周辺は、古くは和邇氏一族の拠点であったが、その陵墓である「東大寺山古墳」で、中国の「中平」年号（西暦184～189年）が入った金象嵌の鉄刀が副葬品として発見された。

年号の入った出土物としては日本で最も古く、さらに、この時期は女王（卑弥呼）が共立され、「倭国大乱」が収まったとされる時期である。

また、和邇氏は、第5代孝昭天皇の第1皇子を祖とするとされているが、古代に海を往来した海



山の麓をたどると弘仁寺（上）と正暦寺（右）がある。



人族とも考えられており、日本の創成神話に度々登場する「ワニ」との関連性も興味深い。

大和王権創成期の天皇に幾人もの妃を輩出した有力氏族であるが、古事記・日本書紀は、なぜかその創成期の事跡については多くを語らず、謎が秘められた氏族である。

「東大寺山古墳」から山の辺の道に戻り、名阪国道の高架をくぐると、やがて山沿いの細い道となり、布留川の谷間に至る。そこに架かる「布留の高橋」は「日本書紀」、「万葉集」にも登場するが、全国の高橋姓の源流ともいわれている。

そして、この高橋を過ぎると、ようやく「石上神宮」に到着する。

（次号に続く・山城 満）